

日本における巴金研究

著者	近藤 光雄
雑誌名	神田外語大学紀要
号	32
ページ	41-65
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001631/

日本における巴金研究

近藤 光雄

要 旨

中国近現代文学作家の巴金について、日本ではこれまで、彼の思想と文学をめぐって研究が行なわれてきた。本稿では、巴金のアナーキズム思想及び日本人研究者の注目を集めた作品五篇に関する代表的な論考を具体的に概括しながら、これまで顧みられることの少なかった日本における巴金研究の整理を試みる。巴金の革命思想の観念性についての指摘、作品のリアリティの欠如に関する議論、並びにこの二つの問題の関係性をめぐる考察を中心とする、先行研究における全体的な特徴を明らかにすることが本稿の目的である。

はじめに

日本において、巴金（一九〇四—二〇〇五）は中国の文豪の魯迅（一八八一—一九三六）ほど多く研究されていないものの、その代表作はほとんど翻訳されており、学術研究の面においても大きな成果が上げられてきた。とはいえ、先行研究の全体的な傾向やその特徴について、これまで十分な整理と考察が行なわれてきたとは言えない。本稿では、一九三五年から二〇一九年にかけて発表された、中華民国時期（一九一二年—一九四九年）の巴金の著作を対象とする先行研究のなかから代表的な論考を取り上げ、思想と文学という二つの側面から日本における巴金研究の全体像を描き出す。なお、中国建国（一九四九年）以降に発表された巴金の著作に関する先行研究については、紙幅の関係で言及しないものとする。

一、巴金の思想について

日本において、巴金のアナキズム思想に関する研究はあまり盛んに行なわれていないが、それを最も早く系統的にまとめたのは樋口進である。『巴金とアナキズム』¹のなかで、樋口は一九三〇年代に至る巴金の思想の展開に焦点を当て、母親及び召使いを通して生まれた人類愛に貫かれた精神、クロポトキン (Pyotr Alexeevich Kropotkin 一八四二—一九二一) 著 *Aux Jeunes Gens* (一九〇四年、邦題は『青年に訴う』) 及びレオポルド・カンフ (Leopold Kampf 一八八一—?) の戯曲 *Am Vorabend* (一九〇五年、中文題は『夜未央』) からもたらされた思想的影響、エマ・ゴールドマン (Emma Goldman 一八六九—一九四〇) のアナキズム思想への関心、一九三〇年代当時泉州民団訓練所で活動していた中国アナキストへの共感などについて考察した。付録では、巴金の生年月日、本名、ペンネームについて考証を行ない、略年譜をまとめたほか、巴金がフランス留学中に尋ねたジャック・ルクリュ (Jacques Reclus 一八九四—一九八四) の中国体験について紹介した。樋口は更に、巴金がフランスに留学するまでに発表した三〇篇に及ぶアナキズム関連の文章についても議論したが、本書を執筆した当初これらの一次資料がほとんど閲覧できなかつたため、目録を頼りに表題を把握することしかできなかつた。とはいえ、樋口はアジアと欧米諸国におけるアナキズム運動及びその関連資料について考察し、内外のアナキストの伝記をまとめる作業を手掛かりに、各々の文章に対して仮説的な見解を示した。

その後、一次資料の整理作業が進むにつれ、巴金のアナキズム思想の研究は新たな段階に突入した。山口守は巴金と欧米アナキストとの思想交流に着目し、その往復書簡を細かく分析した。それによれば、一九二五年から一九二八年に至る、エマ・ゴールドマンとの手紙のやり取りにおいて、巴金は、共産主義勢力が台頭し一部の中国アナキストが国民党と癒着し右傾化するなか、中国アナキ

¹ 樋口進『巴金とアナキズム』、紀要 No. 一四 (西南学院大学学術研究所、福岡、一九七八年十月)。

ストがいかに自主性を確保し世界のアナーキズム運動と連帯を図るか、という問題に強い関心を寄せた。また、フランスに留学した一九二七年、巴金はアメリカで発生したアナーキストへの迫害事件であるサッコ＝ヴァンゼッティ事件を知り、ヴァンゼッティ（Bartolomeo Vanzetti 一八八八—一九二七）と書簡を交わした。無実の罪で死刑を宣告されながらも理想と信念を堅持し続けたヴァンゼッティの姿に深い感銘を受けるとともに、自己と世界を繋ぐ絆を確かめ、北伐時期に中国アナーキズム運動の現場から離れたことに抱いた孤独と寂寞を払拭したという。山口はこのほかにも、巴金が一九四〇年代に欧米アナーキストと交わした書簡を整理し、この時期のやり取りはアナーキズム思想をめぐる議論を主軸とするものではなく、アナーキズムの関連資料に関する意見交換を中心とするものであると指摘し、巴金におけるアナーキズムへの関わり方の質的変化を跡づけた。²

新谷秀明は、一九二五年から一九二八年にかけてアナーキズム系刊行物『民鐘』、『学灯』（『時事新報』副刊、上海）、『洪水』、『無政府主義与实际問題』、『平等』などに掲載された巴金の言論について考察し、アナーキスト巴金の政治的立場の変化がもたらす内面の動揺を明らかにした。それによれば、一九二〇年代初期にアナ・ボル論争が行なわれた後、多くの中国アナーキストがマルキストに転向し、中国アナーキズム運動は徐々に衰退していったが、巴金は純粋なアナーキズム思想を堅持し、マルクス主義のプロレタリア独裁理論及び革命後ロシアのレーニン政権を批判した。しかし、間もなく運動の現場から離れフランスに留学すると、巴金はアナーキストとして個別の政党を否定する一方で、国民革命を飛び越えて無政府社会を実現させることはできないと考え、中国アナーキストが国民革命に加わることに賛同するようになった。だが、四・一二クーデターが勃発すると、一時は国民党擁護に傾いた巴金はたちまち中国アナーキストの右傾化を批判し、再びアナーキストの政治的立場を表明したという。新谷は、巴金のこの

² 関連する論考は多数あるが、紙幅の関係で個別に列挙しない。山口守『巴金とアナキズム——理想主義の光と影』（中国文庫、東京、二〇一九年三月）第一章を参照されたい。

二面性を、革命運動のなかで政治的立場の表明を求める現実的な自己及び革命の理想像を追い求める精神的な自己として区別し、前者が閉塞状態に追い込まれると後者に逃避する意識が働くとして分析し、アナーキズムの理想への回帰は中国の現実からの乖離を意味すると結論した。³

巴金のこのような姿勢は、その直後に出版された『従資本主義到安那其主義』（一九三〇年）にも現れている。新谷によれば、巴金はアレクサンダー・バークマン（Alexander Berkman 一八七〇—一九三六）著 *Now and After : The ABC of Communist Anarchism*（一九二九年、邦題は『アナーキズムのABC』）の一部を削除し全体の七割近くの内容を本書に収め、新たに加筆修正を施した。例えば、原著第十九章「Is Anarchism Violence?」が削除されたが、それは、アナーキズム革命の原理と実際を一般民衆向けに解説するという本書の性質を重視して、敢えて、テロリストに対する自らの敬意、及びバークマンのテロリストとして経歴と結びついた本章を排除したためである。また、本書第二部「安那其主義」には第四章「階級闘争」、第五章「革命的安那其主義」が書き加えられたが、それは、原著におけるバークマンの理想主義的な要素を修正し、本書を、階級闘争を重視するクロポトキン流の現実的なアナーキズム理論に近づけさせるためであるという。⁴

坂井洋史は中国におけるサンジカリズムについて考察し、巴金のアナーキズム思想の特徴を明らかにした。それによれば、中国アナーキズム運動はサンジカリズムを現実的基盤とし、アナーキストたちは先行者における思想的未分化を批判することで自らの思想の純粋性を主張する傾向を持っていたという。例えば、中国アナーキストによって組織された湖南労働会は反軍閥という目的を前にして共産主義との異質性を鮮明にし得なかったため、組織内部の一部の活動分子が非政治主義、自由連合などサンジカリズムを標榜して新たに上海工団連合会を結成し

³ 新谷秀明「巴金初期思想論」、『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』（樋口進先生古稀記念論集刊行会編、中国書店、福岡、一九九〇年四月）。

⁴ 新谷秀明「巴金『資本主義からアナーキズムへ』の成立過程に関するノート」、『西南学院大学国際文化論集』第二六巻第二号（西南学院大学学術研究所、福岡、二〇一二年三月）。

た。また、上海工団連合会は組織大綱において執行委員会に大きな権限を認め自由連合の精神と抵触を来し、更に五・三〇事件後に反共勢力のみを突出させたサンジカリズムを展開し、国民党と結びつき右傾化したため、一部のアナーキストは組織を脱退し上海工団自治連合会を結成した。しかしながら、上海工団自治連合会が解散を強いられ中国アナキズム運動が衰退すると、中国アナーキストは実践活動を批判し自らの思想の純粋性を主張することができず、思想の前衛に立っているとの自負によって己の信念を支え、言論そのものが観念化の傾向を辿った。巴金はこの頃にアナーキストとして登場し、実践活動に挺身する機会を逸して批判対象を持たなかったため、フランス留学による思想亡命を選択することで、ようやく思想の純粋性を守り抜いたのである。⁵

アナキズムに対する巴金の教条的とも言える信念は、その後いかなる変化を見せたのだろうか。坂井洋史は福建泉州における中国アナーキストの活動、及び巴金がそれに寄せた関心を取り上げ、巴金におけるアナキズム思想のある種の変質について考察した。それによれば、巴金は、一九三〇年から一九三三年にかけて三度泉州を訪れ、黎明高級中学、平民中学で教育活動に携わる葉非英（一九〇六—一九六一）や陳範予（一九〇一—一九四一）などの中国アナーキストと親しく付き合い、彼らの自己犠牲の精神に触れた。そしてそれが、かつてフランス留学中にクロボトキン著 *Ethics : Origin and Development*（一九二四年、邦題は『倫理学 その起原と発達』）を翻訳した際に感銘を受けた、フランスの哲学者ギュイヨー（Jean-Marie Guyau 一八五四—一八八八）の説く「生命の開花」という倫理学説を具体的に体現するものであると気づき、深い共感を寄せた。このような体験を経て、巴金はそれまでにアナキズムに抱いていた観念的な信念を打ち捨て、「生命の開花」を己の人生哲学に据えるに至ったのである。⁶

⁵ 坂井洋史「一九二〇年代の中国アナキズム運動と巴金」、『猫頭鷹—近代中国の思想と文学—』第一号（「新青年」読書会、東京、一九八三年六月）。

⁶ 坂井洋史「巴金と福建泉州——黎明高級中学、平民中学のことなど」、『猫頭鷹—近代中国の思想と文学—』第五号（「新青年」読書会、東京、一九八六年九月）。関連する論考に、坂井洋史「巴金と『平

坂井洋史は更に、アナキストとしての巴金——行為者、及び作家としての巴金——表現者という二つの自己意識を設定し、六〇年あまりに渡る巴金の作家生活におけるアナキズム思想と文学との関係やその変化を、四つの段階に分けて時系列に分析を行なった。それによれば、第一段階は一九二一年から一九二五年までである。巴金は人類愛とも言うべき抽象的な原理に立脚し、「万悪の政治」や「社会革命」などアナキズム特有の語彙或いは白話詩を通して社会制度の不正を批判しており、行為者と表現者の態度が未分化のまま混然としていた。第二段階は一九二五年から一九二七年までである。巴金は、実践活動にコミットできないとの焦燥感から、サンジカリズムに憧憬しボルシェビズムを批判し、その政治的主張が観念的な傾向を辿った。また、アナキストとしての自己認識から現実的な闘争を求めるももはや言葉しか残されていないため、政治的主張に対応するものとして、信念に殉じたアナキストの列伝を執筆し、先駆者にオマージュを捧げた。第三段階は一九二七年から一九三〇年代にかけてである。巴金は、行為者としての挫折によって表現者たるべき「覚悟」を引き出したが、「行為を奪われたからとはいえ、言葉の彫琢に沈潜できるほど、言葉を信じること篤くなかった」ため、「擱筆」を宣言したり「文学の無力をいい、執筆に従事することの不本意を嘆」いた。その一方で、巴金は、そのような「矛盾」、すなわち「行為と言葉の狭間に立って、不本意と諦観される状態が、[……]『真実』なものであると納得することで、自らを行為の呪縛からひとまず救済し得た」のである。第四段階は一九四〇年代以降である。巴金は、「『不本意』はもはや逃れ得ぬ宿命と諦観」しつつ、習慣的に「行為と言葉の間に何らかの折り合いをつけ」ていた。これに伴い、巴金のアナキズム思想も「急進的なものから穏健なものへと変化」したが、その根拠にギュイヨーの説く「生命の開花」という倫理学説を据えることで、巴金は「言葉を紡ぎ出す営みは決して行為を代償し得ないが、しかし、必

凡人』」、『魯迅と同時代人』（『汲古選書』四、魯迅論集編集委員会編、汲古書院、東京、一九九二年九月）が挙げられる。

ずしも社会的に無意義ではないという確信」を獲得するに至ったのである。⁷

以上、巴金の思想に対する日本人研究者の評価を概観した。以下では、巴金の文学に対する評価を紹介する。

二、巴金の文学について

個々の作品の研究状況を取り上げる前に、まずは巴金の文学の全体像に対する日本人研究者の評価を紹介する。

日本で最も早く巴金の文学を評した研究者は岡崎俊夫である。一九三五年、岡崎は巴金の初期の文学に対して初歩的な評価を行なった。それによれば、「巴金は中国の革命文学が浪漫主義を捨て、新しい現実主義の道を歩み始めた後もなほ浪漫主義の牙城を守つてゐる無政府主義作家である」ため、彼の文学とりわけ労働階級の生活を描いた作品は失敗に終わり、左翼の評論家の谷非（胡風 一九〇二—一九八五）の批判を招く原因となったという。岡崎はまた、「一つの矛盾が彼の浪漫主義と新興階級〔労働者階級——引用者〕の生活を描かんとする要求との間に横つてゐる」と指摘したが、ロマンティズムの問題が盛んに議論された当時であつて巴金がいかにその矛盾を解消するかに注目した。⁸

戦後、立間祥介は、巴金と家との関係、家からの脱出とフランス留学、文学生活の開始、抗日戦争後という四つの段階に分けて、巴金の経歴とその文学の変遷を整理した。それによれば、巴金は、幼少期に母親から普遍の人類愛の精神を植えつけられ、若い世代を抑圧する不合理な家族制度に憎悪を抱いたため、五四新文化運動時期に、支配権力を批判し経済的平等を主張するアナーキズムに傾倒した。その後、巴金は光明を求めて故郷を離れ上海を訪れるが、強大な統治権力の弾圧の前にアナーキズムの無力さを痛感すると、北伐時期にフランスに留学し、

⁷ 坂井洋史「巴金を読む—『不本意な批判者』の六十年」、『季刊中国研究』第一六号（中国研究所、東京、一九八九年九月）。

⁸ 岡崎俊夫「来朝中の中国文人 巴金」、『中国文学月報』第二号（中国文学研究会、東京、一九三五年四月）。

普遍の人類愛を理想とするアナーキズムの実現を他郷に託した。この頃から巴金は創作活動に専念し始め、処女作『滅亡』（一九二九年）において愛と憎しみの相剋及び人が人を食うあさましい現実を描き、代表作『家』（一九三三年）において崩壊しつつある封建的大家族の実態とその悲劇を暴露した。しかし、彼は現実を批判する武器として文学を捉えたゆえ、理想主義を基調とする文学観を形成し、性急に主題を追求するあまり人物の類型化を招いた。抗日戦争時期に至ると、巴金は知識人の苦悶と脆弱に目を向け始め、大後方を支配する封建勢力に反抗の声を上げた。彼は、『家』の覚新と同様に新と旧の板挟みに苦しむ脆弱な人物として『寒夜』（一九四七年）の主人公汪文宣を描いたが、覚新には新しい世代、すなわち弟覚慧への期待を抱かせたのに対して、汪文宣には進んで現状を打破する行動を取らせなかった。しかし、それは愛の喪失を意味するのではなく、現実のなかに残された僅かな場所で己の理想を燃やすことを意味している。そのことは、新たな活動の拠点を求めて故郷を離れ上海を訪れ、また理想を追い求めてフランスに留学したことと同じであるという。⁹

山口守は民国時期に発表された巴金の作品を時系列に沿って三つのグループに分類し、巴金における文学の完成過程を描き出した。それによれば、一つ目のグループに含まれる作品は、一九二〇年末頃から一九三〇年代初期にかけて書かれた「恋愛と革命」をテーマとするものである。巴金はこれらの作品のなかで理想を掲げて現実と格闘し挫折する青年たちの姿を描いているが、作家自身の思想と感情を過度に注ぎ込んでいるため、自立した作品世界を構築することができなかった。二つ目のグループに含まれる作品は、一九三〇年代初期から末期にかけて書かれたもので、封建的な家族制度を批判した『家』に象徴されるように、作者自身の実体験に基づいており、ある程度のリアリティを具え時代や社会と結びついている。しかし、作中に描かれる巴金の体験は題材のレベルに留まっており、創

⁹ 立間祥介「巴金」、『現代中国の作家たち』（竹内好、岡崎俊夫編、和光社、東京、一九五四年七月）。

作態度も以前のそれとほぼ変わらない。三つ目のグループに含まれる一九四〇年代の作品では、一人称の叙述者が作品世界をその外部から観察する表現手法が取り入れられ、それまでの創作方法が克服されている。また、日常的な体験によって形成された巴金の生活意識が作家のヒューマニズムやロマンティシズムと融合したことにより、抗日戦争下の市井の人々の暮らしを題材とするこの時期の作品には人間性がリアルに表現されている。そして、その到達点に位置づけられる小説こそ、人間の自由、エゴイズムなどの問題を扱った『寒夜』であるという。¹⁰

以上、巴金の文学の全体像に対する日本人研究者の評価を紹介した。以下では、巴金の作品を五篇取り上げ、個々の研究状況を概観する。

(一) 『滅亡』について

一九三五年、岡崎俊夫は巴金の文学を評する際に『滅亡』に言及しており、「同年文壇の代表的傑作として問題となったこの長篇は、一革命家の死に至るまでの果敢な闘争を描いたもので、相当迫真的な描写もあるが、全体として虚無的、浪漫的な色彩が濃厚である」と指摘した。¹¹

その五年後の一九四〇年、『滅亡』の最初の和訳本が出版された際、興亜書局編輯同人は「頭言」のなかで、『滅亡』は「この種の小説には稀らしく浪漫的であり、主人公杜大心における「虚無主義と人道主義の対立葛藤」を描いた作品であると評したほか、杜大心が「自己と自己の意欲とを更に大きいものゝ為に犠牲にし」たことに感銘を受けたと述べた。¹²十年後の一九五一年に二冊目の和訳本を出版した飯塚朗も、『滅亡』は、巴金の「初期の虚無観をむき出しにしたもの」であり、一九二〇年以後の中国において「愛と憎悪」をテーマとする典型的な作品であると評し、その「革命的ロマンチズム」ゆえに多くの読者を獲得する

¹⁰ 山口守「巴金の小説について」、『人文学報』第一五六号（東京都立大学人文学部、東京、一九八二年三月）。

¹¹ 岡崎俊夫「来朝中の中国文人 巴金」。

¹² 興亜書局編輯同人「頭言」、巴金『滅亡』（山県初男訳、興亜書局、東京、一九四〇年七月）。

に至ったと述べた。¹³

このような評価はほかの研究者の間にも浸透しており、例えば小野田耕三郎は、巴金は「愛と憎しみ、理智と感情、思想と行為」といった「二元的対立という人間性に内在する矛盾」を捉え、普遍の人類愛を追求することでその調和統一を図ったと評した。小野田の指摘によれば、そのことは更に、「革命と恋愛という相剋を題材」とする『滅亡』において、「可憐な恋人の愛をふり切って同志の復讐に身を破滅させ」、「自己を犠牲にして普遍的人類愛のために死」を選び「きわめて崇高な理念」に生きた杜大心の人物像に端的に現れているという。¹⁴新谷秀明も、杜大心は、『愛』が損なわれる程度に比例して『憎しみ』が増幅する」という「特異な憎悪観を持つがゆえに、生きるためには自己矛盾を抱え込まなければならなかった内向する精神の主体としての一面」を有すると同時に、「同志の犠牲に報いるため勇敢な死を選んだ行為者としての一面」も持っている、人物の二面性について分析した。¹⁵

ところで、小野田耕三郎は先の議論のなかで、杜大心は「自己の生を蔑視することによつて、敵の生をも蔑視するという、あきらかに虚無とよばれる状態」にあったと、主人公の虚無観に言及している。¹⁶坂井洋史はこの評価に同意しつつも、「そうなることによつて彼の行為は、普遍的『人類愛のためだ』という目的として肯定された」¹⁷という小野田の見解はテロルにおける愛（または憎）の役割を過大視するものであると異を唱えた。坂井によれば、杜大心は人が人を食うことのないユートピアな愛を理想とし、その挫折が食人社会の罪悪への認識と結びついて憎悪の念を抱き始めるとはいえ、そのような愛憎をめぐる認識は「テロ

¹³ 飯塚朗「訳者序」、巴金『滅亡』（飯塚朗訳、雲井書店、東京、一九五一年八月）。

¹⁴ 小野田耕三郎「巴金という作家について（一）——『滅亡』・『憩園』をめぐる——」、『北斗』第一卷第三号（中国文学会、東京、一九五五年二月）。

¹⁵ 新谷秀明『『滅亡』と『新生』——文学者巴金の出発点、』『未名』第九号（中文研究会、神戸、一九九一年三月）。

¹⁶ 小野田耕三郎「巴金という作家について（一）——『滅亡』・『憩園』をめぐる——」。

¹⁷ 同上。

ルという個人的な行為を支える観念と呼ぶには余りに抽象的」である。杜大心をテロルに駆り立てるためには、「己れの実存を賭けたテロルと滅亡を以てようやく秤量し得る程の重い罪」が科せられる必要があるという。それはすなわち、杜大心の「平等主義」を信奉し、食人社会を無くすべくともに闘ってきた同志の張為群を死に追いやり、理想という名のもとに同志を食ったという罪であるが、杜大心は我が罪を贖い良心を慰めるために、戒嚴司令を狙撃し自らも拳銃自殺を遂げたのである。坂井は更に、『滅亡』のストーリー展開に影響を与えたとされるステプニャーク (Sergey Stepanyak-Kravchinsky 一八五一一一八九五) 著 *The Career of a Nihilist* (一八八九年、邦題は『恋の革命家』) についても考察している。それによれば、主人公アンドレイは、彼を中心に進められた同志の脱獄計画が二度も失敗したことで罪の意識に苛まれ、その罪の意識に触発され皇帝暗殺を実行することでようやく我が罪を贖い安息を得たという。坂井はここに二作の共通点を見出すとともに、二人とも革命の現場から離れた後に上述の作品を執筆し、「現実の運動に参加することを切実に求める心情が、行為の極限的な形としてのテロルへの共感を生み出す」と指摘した。¹⁸

坂井洋史の評価とは対照的に、近藤光雄は、贖罪意識に駆られた杜大心とアンドレイのテロルは、いずれも良心を慰藉する意味を持つだけに、「罪を背負うという苦痛からの解放を求める行為」、すなわち「自己愛」に満ちた行為であると解釈した。近藤は更に、杜大心の信条——「自分の幸福を他人の苦痛の上に築いた者は、みな滅びなければならない」——と贖罪意識との関係についても考察している。それによれば、杜大心は、貧しさゆえに家を追われた親子が住んでいた部屋に引越し、また、彼の「平等主義」を信奉した張為群を死に追いやったように、期せずして二度も人を食い自らの信条を破っている。それにもかかわらず、張為群だけに対して贖罪意識を持ち、張為群を処刑した戒嚴司令を狙撃したのは、

¹⁸ 坂井洋史『『滅亡』について——巴金における『亡命』の意味(一)』、『猫頭鷹—近代中国の思想と文学—』第三号(「新青年」読書会、東京、一九八四年六月)。

己の罪を贖うための彼のテロルが政治的な意識——「平等主義」を宣伝し社会革命を先導すること——に貫かれていたからであるという。そのみならず、杜大心は贖罪意識から解放されるための自殺を図る覚悟のもと戒厳司令暗殺を実行することで、自己犠牲を前提とする政治的殺人を正当化し、その結果、殺人行為に抱く躊躇いや恐怖など、人間に内在する普遍的な感情を喪失したのである。¹⁹

(二)『雪』について

炭坑夫による労働運動を描いた『雪』（原題は『萌芽』、一九三三年）は巴金の代表作とは言えないが、日本人研究者の注目を集めた小説である。最も早く本作に言及した岡崎俊夫は、『雪』には「浪漫的な空気は全篇に漂つてゐる」と指摘しつつも、「以前の虚無主義的、人道主義的な暗さや甘さは無く、描写もかなりリアルである。殊に坑内に爆発があつて数個の死体が引き上げられる場面のあの醜い利己的な人間性の描写など実に素晴らしい」と評した。²⁰

一九四九年、『雪』の和訳本が出版された際、訳者の寫静子は「訳者のことば」のなかで、本作は『自己の幸福を他人の苦痛の上に築く者はすべて滅亡せねばならぬ』という処女作『滅亡』の思想をそのままに『虐げられる階級のために憤る』巴金先生の進歩的な思想が滲みでて」いる作品であると評した。寫は更に、プロレタリア文学作家の小林多喜二（一九〇三—一九三三）の小説『蟹工船』（一九二九年）に触れ、二作には「多少思想的な相違こそあれ、ともに中国や日本において今なお根強い封建的な圧力の中から抜け出そうとしてもがく、虐げられた働く階級の生々しい生活の記録が描かれてい」と述べた。²¹

青江俊之介によれば、巴金は『雪』の和訳本が出版されるとそれを自ら石川三郎郎（一八七六—一九五六）に贈ったという。青江が『雪』の和訳本に触れたの

¹⁹ 近藤光雄「巴金における自己犠牲の倫理」、『中国近現代文化研究』第一九号（中国近現代文化研究会、東京、二〇一八年三月）。

²⁰ 岡崎俊夫「来朝中の中国文人 巴金」。

²¹ 寫静子「訳者のことば」、巴金『雪』（寫静子訳、大雅堂、京都、一九四九年二月）。

も石川を通してであったが、彼は日本のアナキズム系刊行物『平民新聞』のなかで『雪』を紹介し、巴金は「日本の所謂プロレタリア文学式の割り切った公式主義で労働者を捉えず、苦悩と新生の芽生えに胎動する人間像を正確にとらえて甘やかさず、思想を立派な芸術作品に昇^{アツ}革させている」と評した。²²

前田蒼子は、「一般に巴金文学の題材といえば、革命と恋の板挟みに悩む青年革命家とか、厳しい現実に対決しきれない小ブル・インテリとか、没落過程にある資産階級の大家族で時代意識に見覚めていく若旦那とかお嬢様達とかに限られているように考えられがち」だが、初期の文学において「労働運動に従事した故に、無実の罪を被せられ処刑される貧しい職人とか、仕事を求めてさまよう浮浪者の群、不当な弾圧と搾取に喘ぐ鉱山労働者達」の生活が少なからず取り上げられていると述べ、「これは、明らかに、自己の創作態度の小ブル・インテリ的な枠を突き破ろうとする巴金の試みであつた」と評した。その一方で、前田は『雪』のリアリティをめぐって従来の積極的な評価とは異なる見解を示した。それによれば、巴金が影響を受けたとされるエミール・ゾラ (Émile Zola 一八四〇—一九〇二) の小説 *Germinal* (一八八五年、邦題は『ジェルミナール』) と比較すると、『雪』において自然景観が具体的に描写されておらず、労働者の宿舎や炭鉱の設備など生活と労働の環境も十分に紹介されていないため、読者は鉱山の全体像を把握することは困難である。また、炭坑夫の口から語られる周春輝の革命黨員としての姿や、炭坑夫を呼びかけ労働組合を組織する趙課員の言動を通して、周と趙の背後に革命組織が存在すると感じることもできて、作家によって具体的に言及されていないため、二人の人物のリアリティは極めて乏しいものとなったという。前田はその理由として、巴金の「思想、信念の骨格をなしているアナキズムの空想的な性格が、必然的に彼の現実に対する態度を曖昧にし、創作態度を

²² 青江俊之介「中国のアナキスト作家——巴金とその作品『雪』、『平民新聞』第一二九号 (平民新聞編集局、一九四九年八月二十二日)。

制約することになった」点を挙げた。²³

立間祥介は一九二〇年代に書かれた労働者を題材とする小説に関する議論のなかで『雪』に言及している。それによれば、瞿秋白（一八九九—一九三五）の小説『瀧漫的獄中日記』（一九二三年）、蔣光慈（一九〇一—一九三一）の小説『少年漂泊者』（一九二六年）及び『短褲党』（一九二七年）の三作は、「労働者を描きながら、生産の現場における働く労働者の姿がひとつもあらわれず、いずれもが戦闘的な労働者という図式にはめこまれてしまっていることで、小ブルジョア階級出身作家の限界をまざまざとめしている」という。立間は更に、『雪』が「冗長で緊迫感に欠けると同時に、組合を組織する過程を素通りし」、また、「生活に密着したリアリティのある労働者像をつくろうと努力はしているが、類型的な描写に終わっている」のは、そのような限界に原因があると指摘し、「観念性と類型化」の傾向は一九二〇年代の文壇に共通するものであると結論した。²⁴

近藤光雄は、労働組合の結成及び労働運動の組織化を描いた『雪』を創作することによって、巴金はサンジカリズムを現実的基盤とする中国アナーキズム運動に参加できなかったゆえに抱く、実践活動への憧憬を表現することができたと評した。近藤は更に『雪』の登場人物に現れた、労働者に対する巴金の「關懷」（思いやり）にも注目した。例えば小劉は、解雇された趙根宝の復職を求めて、自らも解雇されるリスクを顧みずに資本家に抗議した。しかし彼は、趙根宝が復職すれば再び搾取に喘ぐ労働者生活を送ることになり、「關懷」に基づく自身の行動が加害行為としての意味を持つことに気づいていないという。かくして近藤は、巴金は『雪』において理想化された労働運動を描きつつ、労働者における非理性的で現実的な内的感情や自己犠牲の精神にも目を向けていると述べた。²⁵

²³ 前田荃子「巴金の初期の創作方法について——『雪』を通じて——」、『中国文芸座談会ノート』第七号（九州大学中国文学研究会、一九五六年三月）。

²⁴ 立間祥介「労働者」、『近代中国の思想と文学』（東京大学文学部中国文学研究室編、大安、東京、一九六七年七月）。

²⁵ 近藤光雄「巴金『雪』論——下層大衆に託されたもの」、『中国學藝聚華：松岡榮志教授還暦記念論集』（佐藤正光、木村守編、白帝社、東京、二〇一二年三月）。

(三) 『家』について

『家』の和訳本が最初に出版されたのは一九四一年である。訳者の服部隆造は『序』のなかで、「東亜の新秩序を確立する」にあたり日本人は新しい思想と文化が芽生えつつある「現実的に新しき支那の姿を直視せねばならない」が、「支那の旧家族制度の崩壊を如実に示し、併せてかゝる旧体制（形式的儒教）に反抗する新しい青年の進み行く途を指さしたる」『家』こそその実情を知る一つの手掛かりであると述べ、出版の意図を明らかにした。²⁶

一九四八年に『家』の二冊目の和訳本を出版した飯塚朗は、巴金、島崎藤村（一八七二—一九四三）、ブルジュエ（Paul Bourget 一八五二—一九三五）の創作した、いずれも家を題材とする作品の比較分析を行なった。それによれば、島崎藤村は、若者たちが己の運命を変えるべく家の「重い荷物を何とかふりすてようともがく」ものの、「運命の家の中にとちこもつて、死へ解放されるまで転々反側してみなければならない」点を『家』（一九一〇年）の軸に据えているため、小説はますます暗さを深め、「救ひのない文学」となった。一方の巴金は、覚慧が封建的大家族のなかで女中の鳴鳳と恋愛をし、家から脱出し上海の民衆のなかに身を投じるなど、若い世代と封建勢力の間に生じる軋轢を描くことで、『家』に明るい希望を与えている。また、鳴鳳の自由恋愛や入水自殺を通して階級性の問題を取り上げ、家の問題を社会問題へと引き上げた。ブルジュエは、*L'Étape*（一九〇二年、邦題は『家』）のなかで、古きフランスの伝統とフランス大革命以降の新思想の伝統との間で葛藤する青年ジャン・モヌロンの個人の良心を通して、民族の良心を掘り下げようとした。そして、モヌロン家の長男で銀行員のアントワンが銀行の公金を横領し、ジュリーがジャンの貴族の友人に誘惑されて身籠り、プチブルジョアであるモヌロン家の悲劇が社会へと広がっていく物語を紡ぐことで、家の問題から当時のフランス社会の問題を捉えようとしたとい

²⁶ 服部隆造『序』、巴金『家』（服部隆造訳、青年書房、東京、一九四一年九月）。

う。²⁷

下條一誠は、巴金『家』は「単なる一家庭の偶然的な崩壊」ではなく「旧社会の基盤をなす封建制度の崩壊」を表現し、時代的意義を具えた小説であると認めつつも、西洋や日本の小説とは異質な印象を与え、不満を抱かせる作品であると述べた。例えば、覚慧の祖父にあたる高老太爺は専制君主的な人物としてしか描かれず、封建的家長以外の側面が切り捨てられている。覚慧の長兄である覚新は全篇を通して妥協的態度と消極的性格を与えられ、その同一の感情が繰り返し描写されている。覚慧は当初から封建勢力に対する強い反抗意識を持ち、理解し合うことのできない存在として常に高老太爺を拒否し、年長者に逆らおうとしない覚新を絶えず非難する役割を与えられている。また、小説の結末において、覚慧は高老太爺と和解し、覚新の助けを得て家から脱出するが、高老太爺と覚新の態度が急変する理由やその心情変化が具体的に語られていない。そして、鳴鳳の入水自殺を知った覚慧は、己の苦悶や無力を表現するなかで家の恐ろしい力を暴露するのではなく、抽象的な思想に逃げ込むことで恋人を死なせた罪を乗り越える人物として描かれた。以上のことから、下條は、巴金がかくも単一的でリアリティに欠ける人物を描いたのは、封建制度は必ずや崩壊するという己の信念をそのまま覚慧に託し、覚慧の視点のみからストーリーを展開させたためであると指摘した。そして、巴金のそのような姿勢は、人間の内面への探求を放棄し、作者の理想を読者に強制し、読者による自由な閲読を制限するものであると述べた。²⁸

山口守も『家』の人物関係に着目している。その考察によれば、巴金は、自由恋愛や金銭問題をめぐって、若い世代と古い世代における世代間の対立関係、及び世代の違いとは無関係の同一世代における内部の対立関係を組み立てており、そこから、「血」によって繋がれた親子における対立関係、或いは「性」によっ

²⁷ 飯塚朗『『家』のロマネスク——藤村・巴金・プーゾ——』、『中国文学』第一〇四号（中国文学研究会、東京、一九四八年三月）。

²⁸ 下條一誠『『家』について——巴金の小説意識についての一考察——』、『中国文学報』第一一冊（京都大学文学部中国語学中国文学研究室、京都、一九五九年十月）。

て結びつけられた夫婦における対立関係を排除している。かくも図式化、単純化された人物関係を描き出すことで、巴金は『家』における人間関係の秩序——儒教的秩序だけを抽出し、「人間を図式的な世界の中に閉じ込めておく軀としての『家』の秩序の崩壊」に対する確信を読者に伝えようとしたという。²⁹

鳴鳳の内面世界を分析した河村昌子は、『家』における人物像の図式化、単純化の問題をめぐって異なる見解を提示している。それによれば、女中の鳴鳳は、覚慧こそ彼女を不幸な境遇から逃れさせる「救い主」であると捉える一方で、大家の坊ちゃんにあたる覚慧は手の届かない遠い存在であると考えたため、「内向する恋愛感情」、すなわち「恋を自己の内面において完結させようとする認識」が芽生えた。それゆえ、高老太爺の友人の馮乐山の妾となることを命じられると、恋愛において受け身の立場にあった鳴鳳は、「覚慧と別れる」——妾となるか自殺をするか、「覚慧と別れなくてすむ」——女中として生涯お館に留まる、という二つの選択肢の間で葛藤を繰り返したという。河村はその過程を四段階に分け、覚慧による救済を受動的に待ち受けていた鳴鳳が自殺を通して覚慧への愛情を積極的に表現するに至ったその心情変化を明らかにし、「封建制度への反逆の象徴」とされてきた鳴鳳とは異なる人物像を描き出した。³⁰

坂井洋史は「読者はいかにテキストを受容するか」という従来の研究に欠けていた視点から『家』を評した。坂井によれば、読者は小説を開く前に各々の人生経験に基づいて作品に対して期待を寄せるものであり、それによって作品への理解を決定するという。例えば、読者は、『家』という作品名に触れると、作中には封建的大家族の生活、或いは作者と同世代の人々に共有される時代の記憶が描かれていると思ひ込むものであり、作品を読み進めるうちに「自伝小説 (Autofiction)」の具えるべきこれらの内容を作中に認めると、「作者＝叙述者＝

²⁹ 山口守「巴金試論——『家』の構造」、『猫頭鷹——近代中国の思想と文学——』第三号。

³⁰ 河村昌子「巴金『家』論——鳴鳳の物語——」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第一三号（お茶の水女子大学中国文学会、東京、一九九四年四月）。

主人公」という観念を形成し、自身とテキストとの間で調和した関係を結び、作品にリアリティを与えるのである。『家』が多くの読者を獲得するに至った理由もここにある。また、読者は、「自伝小説」の作中人物がプラスの価値を最終的に獲得するための成長を見届けることで自らの期待を満たす場合が多いため、自ずと、封建勢力に対して妥協的態度を取り続けた覚新を毛嫌いし、新たな時代の要求する新しい人間へと成長してゆく覚慧を高く評価するという。坂井は更に、覚慧の人物像は、『滅亡』から『憩園』（一九四四年）に至る創作過程、すなわち巴金のアナーキズム思想が「信念」から「人生哲学」へと変質する過程のなかで生まれているため、作家の「人生哲学」が最も早く託された存在、巴金の人間理解の転換点を示す存在であると指摘した。³¹

（四）『憩園』について

『憩園』には三種類の和訳本が存在する³²が、作品研究はあまり行なわれておらず、数篇の論考と僅かな書評しか発表されていない。最も早く『憩園』を翻訳した岡崎俊夫によれば、巴金は魂、苦痛、愛ばかり真面目に考え「ゆとりのある態度で現実をみるということをしないう作家で、『憩園』を見ても、「街に晩画を見に行つて姚夫婦が急に子供の教育方針を改めるなど、[……]何か甘く安っぽい気がする」という。³³『憩園』「訳者あとがき」においても、岡崎は相変わらず、『憩園』は「戦時中のものでありながら、[……] 戦争の影がほとんど見られない」、「『正面の現実』を回避した弱々しい小市民文学の典型である」と指摘するが、その一方で、この時期の巴金の作品には「ヒロイックな激情はうすれ、片隅に生きる平凡人の哀歎に暖い愛の眼をそそぎ、そこに深く人間性をさぐろうとい

³¹ 坂井洋史「重読『家』——略談読者接受文本的機制及其『關於「人」的想象』、『一股奔騰的激流——巴金研究集刊卷四』（陳思和、李存光主編、上海三聯書店、二〇〇九年六月）。

³² 『憩園』の和訳本は以下の通り。巴金『憩園』（岩波新書）版、岡崎俊夫訳、岩波書店、東京、一九五三年八月）。巴金『憩園』（奥平卓訳）、『現代中国文学 四 老舍、巴金』（河出書房新社、東京、一九七〇年十一月）。巴金『憩園』（村岡圭子訳、幻洋社、函館、一九九三年八月）。

³³ 岡崎俊夫「巴金の深刻さ」、『中国文学』第一〇一号（中国文学研究会、東京、一九四七年十一月）。

う傾向が見える」と評した。³⁴

小野田耕三郎は、『憩園』に見られる巴金の自己拡張の思想に着目し、それを、「自己と他人の調和という理想」、或いは「人間性の立場からの社会的なもの、個人的なものとの内面的統一の現れ」と解釈した。³⁵ 檜山久雄は、作中の自己拡充の欲求は、ロベルト・ロッセリーニ（Roberto Rossellini 一九〇六—一九七七）監督の映画 *Europa '51*（一九五二年、邦題は『ヨーロッパ一九五一年』）の主人公が貧民のなかに入り込み慈善事業に携わる行動を連想させると述べている。檜山によれば、映画において民衆への愛を強調する「イタリアン・リアリズムも戦争の傷痕という枠を出て一九五一年のヨーロッパに対しては、もう無力である」のに対して、巴金は自己拡張の思想を「有閑夫人の憧れ」に終わらせず、作中における作家の執筆活動に影響を及ぼすものと位置づけ、リアリストの一面を見せているという。³⁶

川田進は『憩園』における「母なるもの」の存在を分析し、作品のリアリティの問題について考察した。作中の「私」は、旧友姚国棟の後妻万昭華に寄せた好意を伝えられずにいたことで、彼女を恋愛対象とみなす代わりに彼女に「母なるもの」のイメージを与え、相互依存の関係を築いた。同様の関係は『第四病室』（一九四六年）にも見られ、主人公陸懐民は生母への愛着が強いあまり、父親が後妻を娶ると家を飛び出し、入院した病院の女医楊木華に「母なるもの」のイメージを認め、依存する心情が芽生えた。川田は女性依存の傾向を「甘え」の意識と呼び、それが、小説の世界を現実とは異なるものへと書き換えさせ、作品のリアリティを欠落させる要因であると指摘した。³⁷

一九七〇年、作家の堀田善衛（一九一八—一九九八）はある座談会で、「『憩園』

³⁴ 岡崎俊夫「訳者あとがき」、巴金『憩園』（岡崎俊夫訳）。

³⁵ 小野田耕三郎「巴金という作家について（一）——『滅亡』・『憩園』をめぐる——」。

³⁶ 檜山久雄「巴金『憩園』」、『新日本文学』第八卷第一号（新日本文学会、東京、一九五三年十一月）。

³⁷ 川田進「巴金の小説にみる『甘え』の構造」、『国際研究論叢 大阪国際大学紀要』第一卷第一・二号（大阪国際大学、一九八九年三月）。

などという小説は、どうしたって立体化せざるを得ないコンストラクションなんだけれども、立体化してこない」と述べたのに対して、竹内好（一九一〇—一九七七）は類似する構成を持つアンドレ・ジッド（André Paul Guillaume Gide 一八六九—一九五一）の小説 *Les Faux-monnayeurs*（一九二五年、邦題は『贋金つくり』）を引き合いに出し、『憩園』の方が立体的であると反論した。³⁸坂井洋史は竹内の指摘に示唆を受け、「侵入」をキーワードに『憩園』における構造の重層性について考察した。例えば、「私」は故郷に帰り姚家の花園「憩園」の一角に寄寓し、これらの閉鎖空間に外部から「侵入」する。姚国棟は楊家から「憩園」を買い取り、楊夢痴と次男寒児の花園に留められた純潔無垢な少年時代の痕跡に「侵入」する。寒児は花を手折りに絶えず「憩園」に「侵入」する。万昭華は姚国棟の後妻として、夫とその前妻の遺子である虎児との父子関係に「侵入」する。前妻の母親である趙老太太は姚家の夫婦間に「侵入」し不和の陰影を醸す。「私」は封建家族の没落と離散など自身のリアルな「物語」の優位性を誇り、虎児への教育方法を改めるよう姚国棟に勧告したり、楊夢痴の悲劇を聞き出そうとするが、「侵入」は拒絶され失敗に終わる。その反面、万昭華の善意に「感化」された「私」は自身の「物語」を否定し、それと母胎を同じくし下層大衆の悲惨な境遇をテーマとする虚構の小説の結末を修正した。また、虎児の偶然の死によって趙家の「侵入」の陰影は姚家から除去され、更には、楊夢痴が身を寄せていた大仙祠が取り壊されることで彼を救済し得なかった万昭華の苦痛の記憶は抹消された。坂井によれば、巴金がかくも作品の焦点を万昭華に一元化するのには、自らの人生哲学に据えたギュイヨーの「生命の開花」という倫理学説を、自己拡張する万昭華の形象を借りて表現しようとしたからであるという。³⁹

³⁸ 「連載座談会 中国近代文学と日本文学 六 文芸講話の受けとめ方」、『現代中国文学 月報』六（河出書房新社、東京、一九七〇年十一月）。

³⁹ 坂井洋史『『憩園』論——『侵入』と花園的結構』、山口守、坂井洋史『巴金的世界——兩個日本人論巴金』（東方出版社、北京、一九九六年一月）。

(五) 『寒夜』について

巴金の代表作『寒夜』は最も多く翻訳された作品である。⁴⁰一九五二年、『寒夜』を最初に翻訳出版した岡崎俊夫によれば、巴金は初期の文学に見られるヒロイズムを徐々に払拭し、「戦争末期になると、その円熟した筆はもつぱら片隅に生きる平凡人の平凡事に向けられ、外面的な描写よりも、人間心理の奥を深く掘り下げ、そこに愛の哲学を托そうという傾向に変つて来た」という。岡崎は、『寒夜』を「インテリの苦悶脆弱」を描いた典型的な作品と評する一方で、主人公汪文宣については「溜息とつぶやきと呻吟のほかは、己れの敵に対し抵抗らしい何一つ示さず忍辱のうちに死んでゆくけれど、しかし彼のこの忍辱こそは、中国の人民大衆が示したあの執拗な抵抗の源泉である」と指摘した。⁴¹

それから間もなく、『寒夜』の合評会が開かれた。⁴²木島廉之は岡崎俊夫の見解に異を唱え、汪文宣の忍辱の精神と中国の人民大衆の抵抗の精神は異質なものであると強調した。汪文宣は、終戦に対して漠然とした希望を寄せているにすぎず、「自己よりの逃避、主体性の喪失、自己批判の放棄の生活」を送っている、というのである。前田芥子によれば、「浪漫的革命時代にあつては、社会環境の变革」を切望し「社会と個人の関係によつて生ずる苦悩」を描き出した巴金は、抗日戦争が始まり「国共の激しい相剋が絶えない社会情勢」のなかでは「個人対個人の関係」、「人間と人間との複雑微妙な触れ合い」を描写するようになった。そのような特徴は『寒夜』において、長期化する戦争がもたらす不穏な社会情勢、肺病、嫁姑の不和に対する無力さゆえに汪文宣を襲った苦悩と孤独として現れて

⁴⁰ 『寒夜』の和訳本は以下の通り。巴金『寒夜』（岡崎俊夫、寫静子訳、筑摩書房、東京、一九五二年七月）。本書は後に、『現代中国文学全集』第七卷『巴金篇』（河出書房、東京、一九五四年九月）に収録された。巴金『寒夜』（常石茂訳、『中国現代文学選集 八 抗戦期文学集 二』（平凡社、東京、一九六三年四月）。巴金『寒い夜』（立間祥介訳、『世界文学全集』七二（集英社、東京、一九七八年五月）。本書は後に、巴金『寒い夜』（「岩波文庫」版、立間祥介訳、岩波書店、東京、二〇一六年三月）として単行本化された。巴金『寒夜』（村岡圭子訳、北書房、札幌、一九八二年七月）。

⁴¹ 岡崎俊夫「訳者あとがき」、巴金『寒夜』（岡崎俊夫、寫静子訳）。

⁴² 『中国文芸座談会ノート』第五号（九州大学中国文学研究会、一九五五年八月）「巴金作『寒夜』合評」欄に掲載された文章は以下の通り。木島廉之「戦争の下で」、穴山徹子「樹生」、外河與志子「寒夜——樹生の生き方について」、前田芥子「巴金的悲劇」、松崎治之「雑感」、小西昇「文宣の生き方」。

いるという。小西昇も、汪文宣は「常に彼と彼の周囲との関係で、彼を無視しても彼の周囲に協調的に生きる」と述べ、そのような受動性ゆえに「常に外部条件に左右されて行動する」と指摘した。穴山巖子は、女主人公曾樹生が「自己の狭隘な世界を固執することしか知らぬ人間」であると述べ、このような人物が描かれる原因は「作者自身の思想がきわめて貧弱なこと」、「生活に浸透していないむき出しの観念である事」に存在すると指摘した。前田芥子によれば、曾樹生は「自分の人生を、より豊かに楽しく生きる」ために、「常に自分自身に対して十分に自然で誠実であることを求め、自分の裡で既に死んでしまっている情熱を、道徳的義務観念やある種の打算によつて長引かせることを避けようと努める」という。松崎治之は、曾樹生に「積極的、理智的なインテリの生き方」のエゴイスティックな面を認め、かつて汪文宣に与えた愛情を振り返ることなく自由のみ追い求める彼女の「理智的頭脳から倫理的な観念が消え去つてしまっている」と指摘した。

その後、『寒夜』は長い間研究者の注目を集めることはなかったが、一九八〇年代後半に再び研究されるようになった。川田進は、フロイト (Sigmund Freud 一八五六一—一九三九) のエディプス・コンプレックス (Oedipus complex) 及びユング (Carl Gustav Jung 一八七五—一九六一) の元型論 (Archetype) を用いて、汪文宣の見た夢を分析した。『寒夜』第二章において、すでに父親を亡くしている汪文宣は空爆のさなかに妻と子の制止を振り切って母親を探しに家を飛び出すという夢が描かれているが、このことについて川田は、「フロイト学説に従って解釈すれば、母への愛着・父への敵意という二大要素を具えたエディプス・コンプレックスの問題を汪文宣は背後に引きずっているのであり、ユング学説に従えば、太母 [Great Mother——引用者] の元型はいわゆるマザー・コンプレックスの基礎をなしており、文宣の情動の原点なのである」と解釈した。川田はまた、「ユングは夢の中に現われる異性像の元型にアニマ (男性の心の中の女性) [Anima——引用者] という名前を与えた」ことを手掛かりに、文宣は最初母親

の上にアニマを投影し「母子一体の世界を作り上げる」が、「やがて母も一人の他人であることを知り、母と対決することで自分の中に独自の女性像（アニマ）〔曾樹生——引用者〕を築き上げた」にもかかわらず、その無意識のなかでは「母親へのコンプレックスが解消されていない」と述べた。川田は更に、「エス」——「苦痛を避け、快楽を求めようとする働き」、「超自我」——「道徳的規制を行なう働き」、「自我」——「現実生活に適応するために本能的衝動を規制する働き」の概念に基づいて、「エス」に動かされる曾樹生と「超自我」の支配を受ける汪文宣の母親との闘ぎ合う二つの勢力の調停者たる汪文宣は、受身の「自我」の役割を担われたゆえ主体的な「自我」を確立し得なかったと指摘し、これら一連の問題のなかに家庭崩壊の原因が潜んでいると結論した。⁴³河村昌子も汪文宣の夢における「母子一体の世界」に着目しているが、それを更に汪文宣と曾樹生の夫婦関係にも敷衍させ、「汪文宣は自分と妻が子供と母親のような関係であることを幸せに感じている」と述べた。⁴⁴

島田恭子は汪文宣の母親と曾樹生の人物像の違いについて考察した。それによれば、中華民国が成立する前後に進歩的な思想に触れた汪文宣の母親は、結婚後の美しい精神生活を期待したに違いないが、封建的な旧道徳の抑圧を受け、自らの願望や理想を放棄せざるを得なかったのに対して、五四新文化運動の申し子とも言うべき曾樹生は、すでに男女平等や自由恋愛といった進歩的な思想を心の奥深くに根づかせており、自由と平等の精神に基づいて汪文宣と結婚したという。⁴⁵河村昌子は清末及び民国時期の女子教育について考察し、汪文宣の母親と曾樹生の価値観の違いを決定づける要因を明らかにした。河村によれば、「汪文宣の母親の学問の内容とは、国民教育の流れの中に位置づけられているとはいえ、旧来

⁴³ 川田進 『『寒夜』の夢分析—汪文宣の自我—』、『野草』第四〇号（中国文芸研究会、大阪、一九八七年九月）。

⁴⁴ 河村昌子 「巴金『寒夜』人物形象考（1）汪文宣」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第一六号（お茶の水女子大学中国文学会、東京、一九九七年四月）。

⁴⁵ 島田恭子 「關於『寒夜』、『巴金文学研究資料』一九九〇年第二期（黎明大学巴金文学研究所、泉州、一九九〇年）。

から女子が持つことを許されていた知識である礼教の婦徳であり」、良妻賢母の養成を目的とするものであった。一方、五四新文化運動以降の大学教育を受けた曾樹生は、「男性と同じ知識を学び、男性と同等の学歴を得る」のみならず、「自立した自由な生活の基盤となる経済力をも有して」いたという。ところで、作品の結末に至ると、母性愛に満ちた汪文宣の母親は、困窮の末家財を叩き売り息子の葬式を出し故郷に帰るといふ悲惨な末路を迎えるが、汪文宣のもとから離れていた曾樹生は再び重慶に戻り、我が子を探し出そうと母性愛に目覚める。河村の解釈によれば、巴金がかくも性急に人物の性格を書き換えたのは、二人の女性に仮託された時代から脱却して、日中戦争終結後の新しい時代への希望を表現しようとしたためであるという。⁴⁶

おわりに

本稿では、巴金の思想と巴金の文学という二つの側面から、八十年あまりに上る日本の巴金研究の全体像を描き出した。全体的な特徴を概括すると、巴金のアナキズム思想についてはその観念性や空想性が指摘され、巴金の文学作品をめぐっては作中人物のリアリティが議論された。一部の研究者はこの二つの問題を結びつけて捉えており、人物におけるリアリティの欠如はアナキズムを含む巴金の革命思想の持つ観念性に起因するものであると述べた。このような指摘は、作中人物の内面や巴金の人間観の問題を考察するうえでたいへん示唆に富むものと言える。筆者の問題関心に即して一例を挙げると、巴金の描く革命家が死に直面したとき、生への執着や死への恐怖といった、生命に内在する本能的な反応とも言うべきものにいかに向き合ったか。そのような内的感情は革命思想によって抑圧、ひいては排除されることはなかったか、といった視点から、上述した問題にアプローチすることも可能であろう。人間の内的世界に対する巴金の捉え方を

⁴⁶ 河村昌子「巴金『寒夜』論——清末及び民国期の女子教育をめぐって」、『現代中国』第七二号（日本現代中国学会、東京、一九九八年十月）。

探求することは、巴金という人間を深く理解し新たな作家像を打ち立てるために不可欠な作業である。今後の研究においては、巴金個人の思想や文学に限るのではなく、彼が受容したロシア、フランスなどの欧米諸国の革命思想や現代文学と比較対照させながら、多角的な考察が進められることが期待される。

参考文献：

- 『巴金研究資料（上・中・下）』（「中国現代作家作品研究資料叢書」、李存光編、海峡文芸出版社、福州、一九八五年九月）。
- 『巴金研究在国外』（張立慧、李今編、湖南文芸出版社、長沙、一九八六年十月）。
- 『巴金研究文献題録（一九二二—二〇〇九）』（李存光編、復旦大学出版社、上海、二〇一〇年十月）。
- 『中国文学研究文献要覧 近現代文学 一九七八—二〇〇八』（藤井省三監修、日外アソシエーツ、東京、二〇一〇年五月）。